

児童に生きる力を届けさせる、中山間



都市との交流

「やんちゃ留学」

佐々木賢一

私の住む川西町東沢地区は、戸数百九十二の中山間地域である。近年東沢では、地域の歴史、伝統、文化を大切に、都市との交流によって地域活性化をはかることを目標に、地域づくりに取り組んでいる。その、中心的な役割を担っているのが「やんちゃ留学」と名づけた山村留学である。

現代のこどもを取り巻く環境は、都市化や情報化の進展などで著しく変化し、さまざまな社会問題を引き起こす要因となっている。豊かな人間性と優れた創造性を備えた青少年の育成は、地域社会や教育の大きな課題であり、そのために各地でいろいろな取り組みがなされている。その一つが、都会の小中学生が年間を通じて農山村の農家や寮で生活する山村留学の制度である。

山村留学は、人間らしく生きる原風景としての農山村が持つ教育的機能、自然の豊かさ、厳しさに触れながら生活することで、自主自律の力が養われ、何よりも生きる力が身につくことが大きな魅力である。

私の住む地域で「やんちゃ留学」を始めたのは、平成三年であり、今年九年目となった。その間、夏休み期間中の短期留学に参加した児童は二百八十八名となり、ホームステイをして地元の東沢小学校に通学した長期留學生は二十名（内一年間は十八名）を数えている。

地域で山村留学に関心を持ったのは、昭和六十三年にさかのぼる。PTAの会議で地域の少子傾向が顕在化したことから、地域教育の活性化の一環として山村留学を検討しようということになった。以来三年間の準備期間中、先進地の視察、先進事例の調査、地域の座談会、アンケート調査などを実施し、地域の合意形成をはかり、地域全戸加入の山村留学協力を設立して、行政に頼らない、いわゆる地域主導方式で、スタートしたのである。

スタートにあたって地域で合意したのは、こどもに対する教育的成果を第一義とする点である。全国の多くの山村留学が過疎対策や複式学級の解消を目的としていることに疑問が投げ掛けられ、留学はあくまでこども主

体でなければならぬことに気付いたためである。

留學生の募集は、川西町と交流のある東京・町田市に限定しているが、私たちが募集を限定している理由は、双方向の交流をめざしていることにある。

また留學生を一年間世話する里親は、手上げ方式とし、協力会から里親をお願いすることはない。これは、病気、けが、事故など万が一の時、他人のせいにはできないという厳しい現実がある以上、自己責任によらなければならぬとする方針からである。他人のこどもを預かることは決して容易なことではない。それよりも里親自身の目的意識が高いことが、継続して受け入れることができる原動力だと思われる。

長期留学は、留學生本人の固い決意がないと挫折することがある。そこで、留學生を決める面接では、本人の意思の確認を最重点にしている。もちろん健康面も気を使わなければならない。留學生に幾人か喘息（ぜんそく）

Value Sight 都市との交流

児童の生きる力をつける支援、中山間



や、アレルギーのこどもがいたが、いずれも症状の改善が見られた。このことは、地域の気候風土や食文化が大きく影響していたと思われ、あらためて地域の環境の重要性を認識させられた。一年間の留学生生活を終えたこどもたちは、文字通りすっかり見違え、心身ともにとくましくなって帰京する。腕の骨折、マイコプラズマ肺炎、喘息の発作などの怪我や病気もあつたが、それらの危機を乗り切つたのは、留学生自身の決意、保護者の理解、里親の献身的な看病、関係者のサポートなど、この山村留学を成功させようとする人たちの

熱意によるところが大きい。

山村留学は、こどもの教育的成果を第一義としてスタートしたが、都市との交流という副産物がまもなく地域づくりの大きな核となった。

東沢で本格的に地域づくり事業に取り組んだのは、山村留学を始めて三年目の平成五年である。この年から三年間、自治省のコミュニケーション活動活性化推進事業の地区指定を受け、留学生の家族を招いてのやんちゃ留学同窓会、地区案内板の設置、炭焼きがまの建設などを次々に実施したが、何といても最大の事業は、平成七年に東沢小学校の児童、教職員全員と地域住民合わせて百十名が町田市を訪問し、町田市のこどもたちの発表会である「ひなた村まつり」に参加したことである。地域民は留学生家族の協力を得て餅つきを行い、多くの市民に東沢の豊穡（じょうじゆ）の味覚を堪能していただいた。またこの時の児童の堂々たる群読や花笠踊りの発表は、町田市民の大きな感動を呼び、いまでも鮮やかに思い出がよみがえる。

その後も里親会の町田訪問、町田の若い女性を対象とした「大寒体験ツアー」などの交流事業が毎年のように行われている。

この十月に三回目のやんちゃ留学同窓会が行われ、町田から多くの家族が東沢を訪れた。新米や果物、野菜などの特産物が町田に宅急便で送られ、着実に交流が根付いていることを実感した。

特筆すべきは、町田市農協によって川西米が産地特定で取引されるようになったことである。平成七年の町田訪問をきっかけに、町田市の行政の働き掛けにより実現した農協間

協同は、年間約一万俵の川西米が取り引きされるまでになっている。特に留学生家族の口コミによる川西米の宣伝効果は抜群の様子。こうして、地域教育の活性化を目的に取り組んできた山村留学は、ものの交流へと進展を遂げたのである。

十年目となる来年は、十月に町田市の国際版画美術館の市民ギャラリーで東沢小学校児童の版画展を開くことが決まった。地域の風景や、伝統行事など特色あるものが題材となる。すでに、町田市の学芸員の方が東沢を訪れ、来年に向けてこどもたちの版画制作を指導していただいている。

山村留学は地域のこどもたちをも、物怖じしないたくましいこどもに変えた。そして山村留学を核とした地域づくりは、私たちに大きな実績と自信を与えてくれた。

人の交流から、文化やものの交流へ あげ道からの挑戦はこれからも続く。

佐々木賢一

東沢山村留学協会会長
昭和23年生まれ
川西町大字上奥田2394

平成3年から短期留学、4年から長期留学を始め、自ら3人の長期留学生を受け入れる。「東沢風土記」の編集、炭焼きがまの建設、さくら咲く里整備、農民具収集展示などの地域づくり事業に取り組み、平成8年に地域づくり推進協議会を設立。現在、町議会副議長。